



# あさひまち

新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター 第18号 2020年6月 ISSN 2185-7431



## 新潟大学旭町学術資料展示館 物語を紡ぐ

新潟大学旭町学術資料展示館 館長 丹治嘉彦



この度新潟大学旭町学術資料展示館の舵取り役を任せられました教育学部芸術環境講座で現代美術を担当している丹治嘉彦です。旭町学術資料展示館運営委員を平成 24 (2012) 年度まで勤めていましたが、縁あって再度展示館の運営に関わらせてもらうことになりました。

新潟大学旭町学術資料展示館（あさひまち展示館）は、平成 13 (2001) 年に新潟大学総合博物館設置に向けての足がかりとして、大学所蔵の貴重学術資料を広く学内外に公開することを目的に『新潟大学旭町学術資料展示室』（通称：あさひまち展示館）として開館しました。それ以来現在に到るまで常設展示はもとより、企画展やギャラリートーク等、展示館主催の催しものを数多く行ってきました。特に大学所蔵の貴重な学術資料を市民に開示できたことは、展示館が果たすべき役割をしっかりと担ったからに他なりません。また、新潟大学は部局間の交流が以前に増して活発になり、新たな価値の創造が多数生まれています。展示館としてそれら新たな価値に丁寧に向き合い、そして光をあて、大学関係者そして市民に向けてそれらを披露できる場として機能することが求められます。

また、展示館のある新潟市には様々な問題が横たわっています。市内中心部古町地区の三越の閉店等が示す街の衰退、あるいは少子・高齢化における問題等が浮上しています。（これらの問題は地域社会の在り方そのものを問われていると言えます。）このような事実によって地域が有していた貴重な文化的な資料や美術作品が行き場を失くし、結果的に消失に繋がること

想されます。これらは新潟大学旭町学術資料展示館にとっても他人事ではありません。地域に眠っている貴重な文化財、あるいは芸術作品等の把握を通してアーカイブする仕組み、そしてそれらを編集して展示という形態をとることは新潟市に立脚し、文化の揺りかごとして機能している新潟大学旭町学術資料展示館の責務であると考えます。また、展示館は実学的な視点とは一線を画し、ある意味文化財や学問のエンターテインメントあるいは観光資源化がその中核となり得ます。つまり数値では測れない領域の博物館において、生きるためには何が必要なのかを問い続け、人が持つ疑問符にしっかりと「解」を出し続けることも展示館の大きな使命なのです。しかしながら、この「解」は一朝一夕では出てきません。様々な領域と関係を密にしながら、そして地域に寄り添うことではじめてそれが可能となるでしょう。微力ながらこの「解」に近づけるよう尽力したいと思います。



# 旭町学術資料展示館長 としての2年間

郷 晃



美術実技、制作系として博物館・美術館からは、その機能を享受し活用する側の立場として、もっぱら作品の展示と、様々な地域に出向いて行って鑑賞している人間でしたが、2018年2月～2020年1月までの2年間、前任の橋本博文先生から、運営する側の立場として館長役を引き継ぎました。



実現が可能であるとの認識を持ちました。

将来は、旭町学術資料展示館運営委員会を中心に検討を進め、大学博物館が設立されてゆくことを期待します。

最後になりますが、展示館のアプローチに「歴史の回廊」をテーマとした石彫作品「A water vein of the memory（伏流する記憶）」を寄贈させていただきました。作品内容、規模、建物との関係性に照らして最適の環境に置かせていただけたこととなりました。

支えていただいた関係者の方々、展示館友の会の方々ののおかげで、何とか館長役を終えることができました。大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

展示館が開設される当時、フレキシブルな企画展示空間の希望を出したことがありましたが、現在は企画展示室を設けてあり、駅南キャンパス「ときめいと」も含めて私の担当していた2年間で、自然科学、美術、書道、考古学分野の展示、イベント、講演、ダブルホームや海外青年協力隊活動報告など、約30件の企画が寄せられ開催されました。改めて活発な運営、多様な活動状況であったことに驚いております。ギャラリーとしての機能を有する施設という意味では、十分使命を果たしている施設と言えます。

展示館は、常設展示空間を含めても大変コンパクトではありますが、新潟市の西大畑地区周辺の文化施設と「異人池の会」というネットワークを形成し、国の登録有形文化財に指定された建築物として周辺の佇まいも含めて、不思議な魅力を発信している施設であります。

2019年12月、「ときめいと」で行われた「形の科学研究センター」主催の講演会で、岡山理科大学恐竜学博物館長の石垣忍先生から、大学の既存施設の特性を活用した大学博物館のあり方をお話いただきました。この講演を聞いて、大学博物館は、箱物として一つにまとまった建物になる必要はなく、五十嵐地区と旭町地区の、各部局の資料の収蔵・保存、研究、展示ギャラリー機能とそれぞれの運営機構を展示館を含めてネットワーク化、集約化できれば、新潟大学の総合博物館として限られた予算でも



## 郷晃彫刻小品展—箱の中の小宇宙—

開催期間：2020年2月15日（土）～3月1日（日）

郷 晃



石の彫刻を手がけて来た自分にとって、黒曜石が天然のガラスなら、ガラスは人工的な石です。

ガラスを素材として扱うことになったのは、岐阜県美術館で1990年代に開催された「世界現代ガラス展」という展覧会において、フェニキア人が紀元0年頃に吹きガラス技法を発明する以前の主流であった古代ガラス技法、パート・ド・ヴェール（仏語、ガラスの練り粉）技法で制作されたオブジェを見たことが始まりとなります。

手軽な素材を用いて個展会場におけるオブジェの並べ方、モニュメントプランニングにおける空間計画として模型を制作、検討を行います。それを小作品として遺すための素材に、グランドとオブジェにはガラスとブロンズ、空間として木の箱を用いて制作するようになりました。

パート・ド・ヴェール技法は、耐火石膏の型にガラス粉末を充填し、素焼きレベルの低温で焼き上げる、いわばガラスの焼き物です。焼き上がって型から取り出した状態はとても素手に優しいものではありません。削ったり磨いたりして手触りをよくするための工芸的処理が必要となります。しかしそれを施すと、工芸的



※本展は3月25日までの開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための臨時休館により、3月1日までの開催となりました。

な領域にシフトして行きます。

彫刻表現として、留まるために、この生々しいありのままのガラスが発信する素材性を残すため、立体作品の額縁として木の箱に入れました。

小宇宙と題した背景は、中国の鄭州市を訪れた際、あるビルの一階フロアから地下にかけて商（殷の前）の時代の城壁が大きなガラスの空間で仕切られて保存されている物件を見学しました。巨大な箱の内側に、自分が立っている地平とは異なる数千年前の地平が存在していることにとっても不思議な感覚を覚えたことがあります。

彫刻は、通常360度のあらゆる角度から鑑賞しますが、石の彫刻を手がけて来て、石の内側をくり抜くような制作手法を通して、覗き見るような彫刻があっても良いと考えていたことがあります。ある展覧会に出品した時、その学芸員の方から、箱の中に何か別の世界が広がっているみたい、との感想をいただいたことに始まります。

授業においては、工芸と彫刻表現の概念の違いを理解してもらうための素材として適していると判断したことから制作課題に取り入れてきました。



## 阿賀町「ショウキ祭り」の鐘馗様を巡るバス見学会に参加して

開催日：2019年12月8日（日）

新潟大学あさひまち展示館友の会 藤田 昌宏



郷晃館長（当時）の引率により、新潟大学の学生さんとともに、平成17（2005）年に新潟県指定無形民俗文化財（風俗慣習）に指定された阿賀野川流域の東蒲原郡阿賀町「ショウキ祭り」の鐘馗様（わら人形）を巡る見学会に参加しました。阿賀町では、武須沢入・平瀬・夏渡戸・大牧・熊渡の5つの集落で鐘馗様の祭りが傳承されています。

まず訪れた武須沢入地区のお堂は、山林に囲まれた集落の入り口にあり、正面に鐘馗大明神が書かれた布が上から吊され、高さ1.7m程の鐘馗様がおられました。

次に訪れた平瀬地区では、阿賀野川に架かる狭い橋を渡った先にある小さな集落の立派なお堂に、新潟大学の学生たちが制作した剣を片手に持って立つ木製の鐘馗様がおられました。今年度の企画展「鐘馗様祭りの歴史からみる平瀬の魅力」で紹介した地域です。

夏渡戸地区は阿賀野川沿いの集落で、男女一対のわら人形を作っているとのことでしたが、男の人形は小さなお堂の中に置かれている一方、女の人形は外に寝かされていました。集落の上下にあるお堂に男女を交代で祀るとのことで、女人形は昨年のものだろうと思いました。

お楽しみの昼食は、阿賀野川が見える眺望の良い“狐の嫁

入り屋敷”内の、“久太郎”でいただきました。菊芋やむかごなど地元食材のお惣菜や、デザートのおはぎが美味しかったです。

大牧地区では若松街道沿いに鳥居もあり、最も立派な鐘馗様で、2.8mの大きさがあり、左手には弓矢を持ち、刀を二本差して股裂き状態で堂々と座っておられ、目立つのは男根でとても丁寧に作られており、鐘馗様を本尊とした信仰の場になっているようでした。

最後に熊渡地区を訪ねました。この地区の正鬼神社に祀られるのは「正鬼様」ではなく、「正鬼様」とのことです。神社の後ろで両手を広げて集落を守っているように置かれた人形は、高さ約3m、右手に短剣、左手に槍を持ち、刀を二本差している正鬼様でした。

阿賀町の鐘馗様は、五穀豊穰、家内安全、無病息災、子孫繁栄、厄除け、厄払いなどを願ったものですが、地域ごとに特徴のある鐘馗様を守る取り組みを学びました。

郷先生は新潟大学のダブルホーム活動で度々阿賀町を訪問されているとのことで、この度の見学会が開催されました。若い学生さんたちと一緒に、楽しく学ぶことができました。貴重な機会をありがとうございました。

## 企画展示



# 中東ヨルダンの子どもの絵

開催期間：2019年5月3日（金・祝）～6月1日（土）

新潟大学大学院教育学研究科（美術科）（平成24年3月修了） 本間 彩子

本展覧会では、私が JICA 青年海外協力隊ヨルダン派遣時に活動した、パレスチナ難民キャンプの女子小学校 1～5 年生の子どもたちが描いた作品を彼らの暮らす中東の国ヨルダンの民芸品や写真などと共に紹介しました。ヨルダン国内にある難民キャンプは古いもので 70 年ほどの歴史があります。ヨルダンの公立学校では美術の授業が行われている所もありますが、難民キャンプなどの学校では、財政難から美術をはじめ、情操教育を行うことのできる学校は少ない状況です。

会場には、子どもたちの描いた作品を授業開始初期から後期への流れに沿って展示しました。初めは何を描けばいいか悩んでいた子どもたち。その中で、少しずつ絵の表現に変化が出てきました。青い目や茶色の髪をした子どもの顔、茶色い岩の山に降る恵みの雨、ドレスでおめかしをした姿、自分の名前をひらがなと好きな色や形を組み合わせた作品。それぞれの作品から、来場者の方々は子どもたちの姿を感じていたようでした。5月3日には、佐藤哲夫教育学部教授と共にギャラリートークを行いました。

たくさんの来場者の方に子どもたちの表現やその生

活の様子をご紹介することができ、嬉しく思います。貴重な機会を与えていただいた展示館の皆様、教育学部美術科の先生方に深く感謝申し上げます。新潟大学在学時にアートプロジェクトに参加した経験は、そこにある資源を生かし、地域の人々と共につくる協力隊として活動する上で大きな財産となりました。

いろいろな環境の子どもたちが、美術に触れることを通して、自分を表現する多様な方法を手に入れていくことがこれからにつながると 생각합니다。ヨルダンを始め、遠く近くつながる世界とそこに暮らす人々を身近に感じていただければ幸いです。



## 企画展示

# 鍾馗様祭りの歴史から見る平瀬の魅力

開催期間：2019年6月15日（土）～8月4日（日）

新潟大学経済学部経営学科（令和2年3月卒業） 本田 彩香



私たちは新潟大学が取り組む地域活性化プログラムのひとつであるダブルホーム活動において、阿賀町で活動するGホームです。平瀬（びょうぜ）では約10年間お世話になってきましたが、平成29（2017）年をもって約450年続く平瀬の鍾馗様祭りがその歴史に幕を下ろすことに伴い、平瀬との活動を終了することになりました。

今回の企画展は、最後の鍾馗様祭りを盛り上げるために一緒に活動させていただいた旭町学術資料展示館館長（当時）の郷先生からのお声がけがあり、これまでホーム発足当初からお世話になっていた平瀬に感謝の気持ちを伝えるため、鍾馗様祭りを何かの形として



残したいという想いで開催する運びとなりました。

展示内容としては、歴代のGホームの集合写真や制作風景の様子、平瀬の風

景、これまで新潟日報に取材して頂いた平瀬に関する新聞記事、実際に使われたお札や鍾馗様の顔などを展示しました。

7月13日に開催されたギャラリートークでは、開催に至った経緯や展示物の紹介をしました。当日は用意した席が満席になり、立ち見が出るほどの盛り上がりで大変嬉しかったです。

お話をいただいたときはどんな展示になるのか想像もできませんでしたが、同じGホームの大橋くんと、Gホーム担当教職員の飯島先生や渡辺さんとアイデアを出し合いながら写真を選んだり、レイアウトを考えたりして素敵な企画展を作り上げることができました。

最後に、平瀬地区の皆様、そしてこの企画展に関わって下さった全ての皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



# 創立 70 周年 新潟大学史パネル展

開催期間：2019年6月1日(土)～6月20日(木) [会場：駅南キャンパスときめいと]  
2019年8月22日(木)～9月8日(日) [会場：旭町学術資料展示館]

旭町学術資料展示館 清水 美和



令和元(2019)年、新潟大学は昭和24(1949)年の創立から70周年を迎えました。また、前身校時代も含めるとその歴史は明治時代にまでさかのぼります。

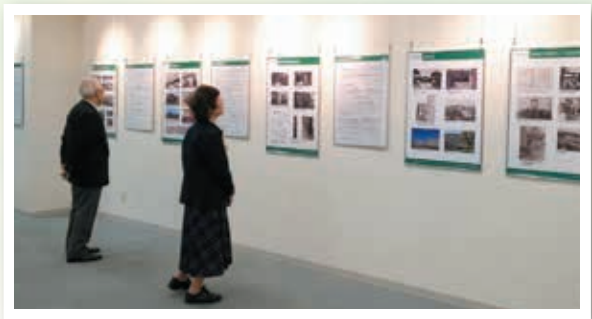
本企画展では、前身校時代も含めた写真パネルと解説パネルにより、明治～令

和にいたる新潟大学の歴史を振り返りました。

写真パネルには前身校時代から現在までの各学部・研究所・附属図書館や学生寮などの建物や入学式・授業風景などの写真に加えて、学部名が書かれた銘板や、屋外に設置した句碑や石碑、同窓会から寄贈された彫刻なども納めました。

解説パネルには各部署ごとの沿革に加え、著名な卒業生・教員を紹介するコーナーを設けました。

観覧者からは、「大学の沿革やキャンパス移転などの歴史がまとめられ、わかりやすかった」、「写真を見て在学当時を懐かしく思い出した」などの声が寄せられました。



\*写真パネルは、昭和38年卒業生・柳本雄司氏の助成を受けて作製しました。また、解説文の作成に当たっては、平成30年度新潟大学副専攻プログラム「文化財学」を受講した学生の皆さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

# アンモナイト展

開催期間：2019年7月20日(土)～8月31日(土)

大学院自然科学研究科博士前期課程1年 川尻 啄真



みなさんは、アンモナイトをご存じでしょうか。アンモナイトは、恐竜や三葉虫とならんで化石の代名詞といえる生き物です。しかし、その生態はよくわかっていません。それはアンモナイトが6600万年前に絶滅してしまったため、その生きた姿を見ることができないからです。そんなアンモナイトにもっと興味をもって欲しいという想いから、今回の「アンモナイト展」が企画されました。

今回の企画展は、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて開催されました。会場には新潟大学での研究や教育に利用されているアンモナイトの化石を展示しました。今回の展示の目玉は、松岡篤理学部教授が採取したプラヴィトセラスと、兵庫古生物研究会代表の岸本真五さんの所蔵標本であるデイデモセラスでした。アンモナイト化石以外にも解説パネルや、体験コーナーとして化石のスケッチ、地質ぬり絵、動物折り紙などを設置しました。

8月3日には、イベントとして「ふれあいトーク」を実施しました。内容は上記の体験コーナーに加えて、化石のレプリカづくりと、岸本真五さんと松岡篤教授による展示解説を行いました。化石のレプリカづくりは、参加者が自分好みの色のレプリカを作成するとい

うもので、大盛況でした。お二方の展示解説ではアンモナイトのお話だけではなく、化石採取にまつわる話などしていただきました。参加者は、み



んな興味津々で聞き入っていました。このように主催者側と参加者の距離が近い企画は、多くはありません。この機会に少しでもアンモナイトに興味をもっていただけたらと思います。

私自身、アンモナイトについては詳しくありませんでした。この「アンモナイト展」を運営するにあたって、アンモナイトの生活様式や体について勉強になりました。それでもわからないことはまだまだありますが、アンモナイトの魅力はたくさん伝わってきました。私と同じように、アンモナイトの魅力を少しでも多くの人が感じてくれたらと願っています。

## 7×彩展 (しちさいてん)

開催期間：前期 2019年12月4日(水)～12月28日(土)  
後期 2020年1月9日(木)～2月2日(日)

教育学部芸術環境創造課程 (令和2年3月卒業) 品田 英恵



教育学部美術科の有志7人で作品展示を行いました。当初は個展をしたいという思いもありましたが、このメンバーでグループ展ができて、よかったと思います。

私たちは、美大のように専門分野だけを学ぶのとは異なり、様々な学部・学科の学生が在籍する環境で学びを深めてきました。そのため4年間美術と向き合ってきましたが、技術を必死に学ぶというよりも多様な視点で美術を見つめ、人生にどう位置付けるか、生活に根差した美術との付き合い方を模索できたと思います。もちろん、知識も技術も高めるために邁進してきましたが、それだけでは見過ごしがちな価値観にも目を向けてきました。

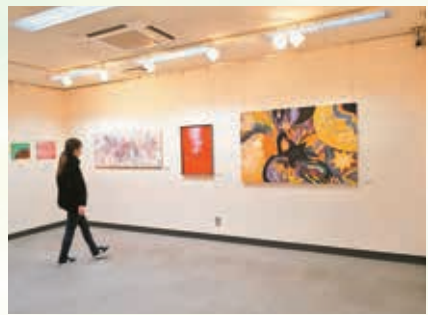
展示では個性ある作品が並びました。創作の動機も、惹かれる素材も、コミュニケーションの方法も異なる人が集まりましたので、当然です。個性のない人間はいませんが、普段は押し込めているものを、美術を介することで何もはばからずに伝えることや、ただ発散することが許されていると私は考えます。

そのような価値を持つべきはずなのに、「この素材を使って、このやり方で、それ以外は劣っている。」といった考え方や評価をする人々がいるのも事実です。そのような考えに触れた時、私はどうして美術を好きになったのか忘れてしまうような感情に陥りま

す。

それは、表現の世界が、自由で制約のない分、支えがなくて不安だからだと思います。でも自分のやりたいようにやり切って、満足いくものができたら、最高です。自分には訳の分からないモチーフも素材も、考えなしにひかれたような線も、それが心地よくて、創作意欲がそこから始まっている人がいる。枠からはみ出た個性的な自分を認めてほしいのなら、他の人の個性も認めることでもっと視野が広がり、何倍も面白い世界に気づく。今回のグループ展は、それを再確認できる有意義な経験となりました。

進路も異なる私たちですが、違う環境で新たな個性がつくれるなかで、大学でお互いに与えあった影響は、ずっと作用していきます。そうして、それぞれの眼差しが変化していくさまを、とても楽しみに思います。



教育学部芸術環境創造課程 (令和2年3月卒業) 畠山 千晶

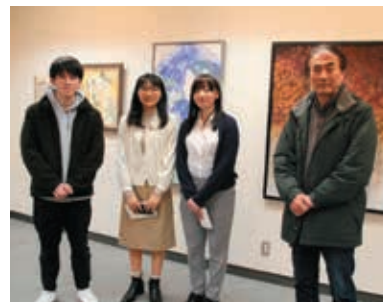
本企画展は、新潟大学教育学部美術科の有志7名による、大学4年間の軌跡を公開する学生支援企画として開催されました。洋画ゼミと日本画ゼミから、前期4名、後期3名に分かれて平面作品だけでなく陶芸やインスタレーションなど多岐に渡る作品が勢揃いしました。過去の作品から新作まで「一人一人の個性が爆発」した、見るごとに作者の思いや表現方法が全く異なる楽しい展示になったと思います。

また、今回は卒業制作展に向けた各自のエスキースや試作の展示も行いました。展示の会期も卒業制作展最終日まで延長していただくことができたため、このグループ展から卒業制作展へ足を運んでくれた方が大変多くおられました。その際に、制作の意図や技法などを興味深く聞いて下さり、展示を通して幅広い年代の方と交流することができました。

2つの展覧会を結びつけたことで、多くの方に見ていただけただけでなく、より私たちの表現の原点や着想について知っていただけたのではないかと感じます。

会期中に行ったギャラリートークには、大変多くの方々にお越しいただきました。各作者が、作品制作の過程や4年間の大学生活について、自由に語り合うとても温かい雰囲気の中でした。私たちも、普段はなかなか言葉にすることがないため、改めて自分自身と向き合う素晴らしい機会だったように思います。

これからはそれぞれが違う進路に進みます。私は、大学院に進学しますが制作や展示はずっと続けていきたいと思っています。4年間での学びを糧に、さらに自身の専門性を深めたいと思っています。本展に関わって下さった先生方、学芸員の方には深く感謝いたします。今後も何らかの形で展示に携わることができたら嬉しいです。ありがとうございました。



## 令和元年度 あさひまち展示館 活動記録

### ●あさひまち展示館企画展示

期 間	タイトル	担 当	展示室
2019.5.3～6.1	中東ヨルダンの子どもの絵	企画展示室	教育学部
2019.6.12～8.17	戦争を考える 2019	企画展示室	人文学部
2019.6.15～8.4	鍾馭様祭りの歴史から見る平瀬の魅力	企画展示室	ダブルホーム (G ホーム)
2019.8.22～9.8	創立 70 周年 新潟大学史パネル展	企画展示室	展示館
2019.9.18～9.29	日本美術院所蔵作品展～画家の見た風景～	企画展示室	教育学部
2019.10.3～11.28	佐渡を舞台とする書画文人展	企画展示室	教育学部
2019.10.12～11.3	わたしたちの佐渡ジオパーク：地学実験 A 実習発表展	2 階ロビー	理学部
2019.12.4 ～2020.2.2	7× 彩展 (しちさいてん)	企画展示室	教育学部
2020.2.15～3.1	郷見彫刻小品展 一箱の中の小宇宙	企画展示室	教育学部
2020.2.20～3.1	めでたい形 子どもの成長を育む郷土玩具	企画展示室	教育学部

### ●あさひまち展示館 サテライト・ミュージアム駅南キャンパス「ときめいと」企画展示

期 間	タイトル	担 当	会 場
2019.6.1～6.20	創立 70 周年 新潟大学史パネル展	展示館	ときめいと
2019.7.20～8.31	アンモナイト展	理学部	ときめいと

### ●フォーラム・講演会

期 間	タイトル	講 師	会 場
2019.6.1	第 17 回新潟大学あさひまち展示館友の会総会 記念講演会「地名発生とその存続の諸相を考える ～新潟市内の微小地名を例に～」	本井晴信 (元新潟県立文書館 副館長)	ときめいと

### ●ギャラリートーク・体験教室・関連イベント

日 時	タイトル	講 師	関連展示
2019.5.3	ギャラリートーク	本間彩子、 佐藤哲夫教育学部教授	中東ヨルダンの子どもの絵
2019.7.13	ギャラリートーク	本田彩香 (経済学部4年)、 大橋慶大 (工学部4年)	鍾馭様祭りの歴史からみる 平瀬の魅力
2019.8.3	ギャラリートーク	橋本博文名誉教授	戦争を考える 2019
2019.8.3	ふれあいトーク	岸本眞五 (兵庫古生物研究会代表)・ 川尻啄真 (理学部4年)・ 竹重倫直 (理学部4年)	アンモナイト展
2019.8.23	ふれあいトーク	清水美和 (旭町学術資料展示館)	アンモナイト展
2019.9.14	灯籠作りワークショップ	清水美和 (旭町学術資料展示館)	キャンドルナイト in 旭町
2019.9.14～9.15	光の造形による空間演出	工学部人間支援感性科学 プログラム3年生	キャンドルナイト in 旭町
2019.12.21	ギャラリートーク	風間美希・品田英恵・ 原田結菜・本間涼 (教育学部4年)	7× 彩展
2020.1.25	ギャラリートーク	阿部麻希・木下大輝・ 畠山千晶 (教育学部4年)	7× 彩展
2020.2.29	ギャラリートーク	郷見教育学部教授	郷見彫刻小品展

【開催中止】2019.10.12「佐渡を舞台とする書画文人展」記念講演会「佐渡文化の魅力ー海を渡って」(台風19号の影響による)

### ●友の会行事

日 時	テーマ
2019.6.1	第 17 回新潟大学あさひまち展示館友の会 総会

### ●資料受入リスト

資料名	説 明	受入年月日	受入種別
A water vein of the memory (伏流する記憶)	彫刻作品 (郷見)	2019 年 12 月 13 日	寄 贈

# あさひまち展示館入館状況

## ●入館者数 (2019年4月～2020年3月)

月	学内		学外			計
	学生	教職員	学生	教員研究者	一般	
4月	28	37	34	61	94	254
5月	9	29	7	39	98	182
6月	76	33	3	25	103	240
7月	142	38	15	37	122	354
8月	6	35	75	30	261	407
9月	16	44	7	36	139	242
10月	109	43	23	37	144	356
11月	13	23	3	32	126	197
12月	22	27	1	28	105	183
2020年1月	24	31	13	48	115	231
2月	4	38	5	21	159	227
3月	0	1	0	4	7	12
計	449	379	186	398	1,473	2,885

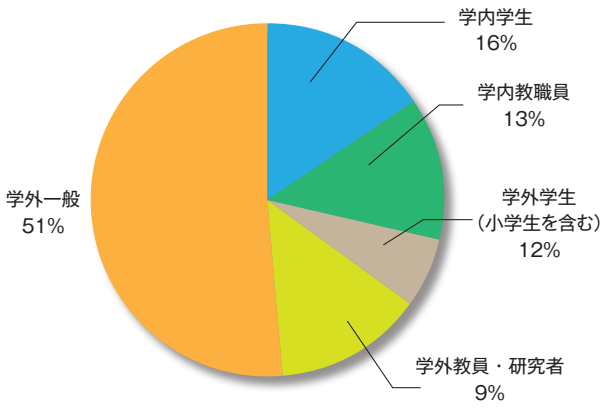
※開館日：水～日曜日の週5日間  
3/4～3/31 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休館

新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター

# あさひまち

第18号

- ISSN 2185-7431
- 発行年月日 2020年6月15日
- 編集・発行 〒950-8122 新潟市中央区旭町通2番町746  
新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館
- 印刷 富士印刷株式会社



## ●団体入館者

日付	団体名	人数
2019年4月14日,19日	北越高等学校2年生	34
2019年5月24日	新潟市立白新中学校1年生	6
2019年6月23日	新潟大学考古学研究部	18
2019年6月18日	新潟市立東新潟中学校 特別支援学級1・3年生	5
2019年10月4日	新発田市立本丸中学校1年生	20
2019年11月6日	きらめきの会	6

## ●講義・実習等での活用

日付	講義・実習名	人数
2019年4月27日	放送大学新潟学習センター 面接授業「われらの地球」	29
2019年6月15日	新潟大学ダブルホーム Gホーム	17
2019年6月29日	地学実験A/理学部	15
通年	博物館見学実習	50

## ●駅南キャンパスときめいと 開催企画展・講演会

日付	講義・実習名	人数
2019年6月1日～20日	創立70周年 新潟大学史パネル展	185
2019年6月1日	第17回新潟大学あさひまち 展示館友の会総会 記念講演会	22
2019年7月20日～8月31日	アンモナイト展	898

**編集後記** 新型コロナウイルス感染症の影響により、当館は3月初めから臨時休館となりました。本稿執筆時点(5月中旬)では状況が改善し、会期中で中止となってしまった郷土館長の企画展を再開できるよう、準備を進めています。丹治嘉彦新館長とともに、新潟大学の「文化のゆりかご」として、成長を続けていきたいと思えます。文化や芸術を味わい楽しむことができる日常が一刻も早く戻るよう願っています。

**リサイクル適性** (A) この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。